

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	野見 収
論文題目	断絶としての教育—L.アルチュセール思想の再検討—		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文はアルチュセール思想の検討を通して、現代教育学の課題を「断絶としての教育」として提示したものである。戦後わが国における発達教育学構想は、国民意識のうちに国家的経済的利害が浸潤することに抗しえなかった。その所以を「人間本質 - 発達理解」と「歴史の弁証法的理解」に見定める。そしてそれを超克する新たな教育の視座と実践を、フランスのマルクス主義哲学者ルイ・アルチュセール (1918-1990)を通じて探究する。</p> <p>アルチュセールの「国家のイデオロギー諸装置 (AIE)」論によれば、諸個人は学校的 AIE のもとで国家のイデオロギーの主体=臣民として形成される。その意味で人間はその本質においてイデオロギー的存在である。そこで人間が自由な意識を得るためには、人間本質を超克し、国家のイデオロギーと断絶する必要がある。</p> <p>第一章は、上部構造の相対的自律性論を検討することにより、「断絶」の存在論的条件を整理する。抽出されたのは「重層的決定」の思考である。上部構造における決定を最終審級における土台の決定の条件と見る重層的決定において、歴史は、単に偶然の産物ではない。それを必然化する主体の力能に左右される。アルチュセールは、歴史を必然化する主体の力能に賭ける。</p> <p>第二章は、1960年代前半から中盤に展開されたエピステモロジー (科学認識論) を検討し、歴史の必然性を理解するのに必要な科学的認識をめぐるアルチュセールの思考を抽出する。経験主義的認識観は現実的対象と認識の対象の差異をイデオロギーによって埋めることで成り立っており、観念論的でイデオロギー的である。この区別を可能にするものは科学の「理論」である。しかしこの時代のアルチュセールはこの「理論」の科学性を理論的に担保できない。まだ見ぬマルクスの哲学 (唯物弁証法) にその希望を託したにとどまる。</p> <p>第三章では、哲学の位置づけが、科学性を担保するものから、ブルジョワ・イデオロギーに奉仕するものへと転換してゆく。哲学は支配的イデオロギーを構成する。今や哲学を退けることこそが科学に近づくことになる。そこで、哲学ならぬ哲学の新しい実践、すなわち「偶然性の唯物論」と「傾向的法則」の思考が確認される。世界の偶然性=特異性が宣言され、あらゆる哲学的なイデオロギーが無効化され、その上で、偶然性=特異性の科学的認識という新たなエピステモロジーのあり方が示される。</p>			

第四章は、偶然性＝特異性の科学的認識の方途をさぐるべく、アルチュセールによる N.マキャベリ論（1960-1980 年代）を検討する。偶然的な歴史の必然化という問題が、中世イタリアを混沌から救い出す新しい君主の到来というマキャベリの課題に重ねられる。新しい君主に必要とされるのは、偶然的な歴史（フォルトゥナ）の必然性を読み取り、それに適応し必然化する力能（ヴィルトゥ）である。そしてこの力能を可能にするのは、自己の情念から距離をとることである。

第五章は、自己の情念から距離をとる方途を探究すべく、B.スピノザおよび S.フロイトを検討する。スピノザにおいてはすべてが神であり、その無限の潜勢力は、自己の有に固執する努力（コナトゥス）として表現される。人間精神は非十全な観念しか持たず、ものごとを偶然の相でしか捉えることができない。そこでコナトゥスは、この観念の非十全性を補うために想像力による仮構（イデオロギー）を生じさせる。また、スピノザにおけるコナトゥスはフロイトにおけるリビドーに相当する。フロイトにおいてリビドーとは生の欲動の力動的表現であり、その目的は個および種の持続にある。しかし生の欲動は死の欲動との葛藤によりその目的を阻害され、快感原則に服する。この快感原則にもとづく欲望は、転移というかたちで他者に投射され、その充足への期待により他者からのイデオロギーの受け取りが促される。

第六章では、フロイト理論、J.ラカンおよび B.フィンク理論の検討を通じ、転移によるイデオロギー的主体形成のメカニズムとその克服の方途が描出される。個人は、転移をつうじて、国家のイデオロギーを受け入れ、主体＝臣民として形成される。その転移を克服するために、ラカン＝フィンクにおける「想定的知の主体」と「その退位」をめぐる議論を検討する。教師（分析家）は、まず、生徒（分析主体）の知るべきことを知っており、それを言葉にして教えてくれる想定的知の主体の役割を演ずる。しかし同時に教師（分析家）は、いずれその役割から退位する。それによって子どもは、他者の自己化のために自己を他者化するという不可能な欲望が、文字通り不可能であることを確認し、転移から解き放たれるきっかけを得る。

終章は、本論文の議論をふりかえり、（発達）教育学の捉え直しが試みられる。教育学は、自由な意識を本質と見る人間本質観にも、人間本質の実現という意味での発達観にも、弁証法的な歴史観にも依拠することはできない。教育学が依拠すべきは、イデオロギー的存在として人間本質であり、コナトゥス／リビドーの自己解放（人間本質の超克）としての発達、そして偶然性から意志によって必然性を作り出す努力（コナトゥス）の過程としての歴史である。そして「断絶としての教育」の実践像が素描される。教師は、例えば、多義的な指導を行い、矛盾的な指示を下し、何も教えない仕方で生徒を攪乱し、生徒の知りたいことに無知な存在（無知な教師）となることによって、生徒に、自己の欲望の不可能性に気づかせ、自らの潜勢力（知性＝コナトゥス／リビドー）だけに従うことに向かわせることになる。こ

うして「断絶としての教育」とは、学校という国家イデオロギー装置における階級闘争のための武器である。階級支配の再生産に抗う教師たちは、この武器によって、生徒たちを国家のイデオロギーと断絶させ、科学的認識へと導く。そしてその生徒たちが次なる世代の大人・親・教師となり、個および種としての自己の有に固執するコナトゥス／リビドーの働きのもとで公教育の創造に参画する。この営みの繰り返しが、長い時を経て階級闘争における被支配者階級の勝利をもたらすのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ルイ・アルチュセールの思想の詳細な検討を通して、現代教育学の課題を「断絶としての教育」として提示したものである。「国家イデオロギー装置」で有名なアルチュセールであるが、本論文はその後の理論展開を丁寧に追い、マキヤベリ、スピノザ、フロイトとの理論的対決を、テキストに即して厳密に解明した本格的な思想研究である。例えば、その精神分析に関する考察は、フロイトやラカンの読解を含め、極めて厳密に遂行されている。

本論文の優れた点は、その骨格をなすグランドデザインである。

第一に、アルチュセールの思想を、時系列に沿って順に跡付けると共に、その全体に通底するテーマを見定め、構造的に解き明かすことに成功した。単なる紹介ではない。「歴史の偶然性(不確定性)を必然化する」というひとつの主題に焦点を絞り込んでいる。この論点は従来のアルチュセール研究では十分に解明されてこなかった点であり、高く評価される。

第二に、この中心主題がすべて「イデオロギーからの断絶」という最終課題に収斂してゆく論文全体の構成である。教育はイデオロギーであってはならない。むしろイデオロギーを断絶し、そこから離れることによって、子どもたちの「知性」を解放する。そうした構図の中ですべての議論が現代教育学の課題に接続する。言い換えれば、現代教育学の中に生徒たちの「知性」を解放する課題を認め、そこから遡ることによって「イデオロギーからの断絶」が要請され、「歴史の偶然性を必然化する」課題が要請される。つまり、現実の課題から研究対象を選び、研究対象によってその課題をより鮮明にしてゆくという手法に成功している。

第三に、国家と個人を接続する回路を解明しつつ、自らの立論がイデオロギーと成らない議論の解明・実践である。子どもが国家イデオロギー装置を自ら進んで受け入れるメカニズムを解明し、その回路を断ち切る方策を示しつつ、しかし自らの議論がイデオロギーとなってしまうことを警戒する。そうした自己批判を内包した議論の立て方(哲学の実践)を、アルチュセールの議論をたどる中で、本論文自体がパーフォーマティヴに遂行している。

以上の考察を通して確認された成果は、以下の点である。

- 1、教育学は「人間の自由」を前提とすることはできない。むしろ人間は本質的に「イデオロギー的存在」である。フロイトのいう「転移」を通じて、国家のイデオロギーを受け入れ、進んでイデオロギー的諸主体となる。
- 2、そこで「断絶」が必要になる。教育は「転移」を克服する「断絶としての教育」として機能すべきである。その際、教師は(1)教える者であり、(2)その立場から退位する者であるという二段階になる。後者の場合、生徒は教師を真似ようとする

るが、教師は「無知な存在（無知な教師）」となる。生徒が自らの欲望の不可能を悟り、自らの潜勢力（知性＝コナトゥス／リビドー）だけに従うことを促すためである。

3、その知性は「法則の認識」ではない。「予測不能な偶然性を必然化する」実践であり、歴史の偶然の中から、自らの意志によって、必然性を作り出す努力である。

4、アルチュセールの哲学が追究したのは、歴史的必然でもなく、単なる偶然でもなく、自由意志の主体化でもない。まさに「予測不能な偶然性を必然化する」哲学の実践であったことになる。

試問においてはいくつかの問題点や課題が指摘された。

一、終章における議論（アルチュセール理論から現実的な教育実践への接続）に飛躍があるのではないか。その際、教師と生徒の二項関係でなく「第三項（教材・教科内容）」の議論が必要なのではないか。二、この視点から教育実践史を読み直すと、日本の戦後教育史に再考を迫ることになる。しかしアルチュセールの「実践」だけで「国家イデオロギー」を断絶することは可能か。

こうした指摘については、本人も十分自覚するのみならず、口頭試問の中でも興味深い議論が交わされ、今後の課題とすることも確認されたため、本論文の価値を貶めるものとはならないと判断された。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年12月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降